

堆肥の効き目は、まくタイミングと土との混ぜ方で変わります

概要 Abstract

有機・クリーン栽培などの環境保全型農業はもとより、一般栽培でも初期生育・収量確保のために堆肥の有効活用がますます重要になっています。

そこで、堆肥をまくタイミング（**春、秋**）と土との混ぜ方（**反転、混和**）によって堆肥の効き目がどのように違うか明らかにしました。



プラウによる**反転**
（深さ約27cm）



ロータリーハローによる**混和**（深さ約15cm）

成果 Results

同じ堆肥でも施用時期や混ぜ方で、畑作物（てんさい、ばれいしょ、スイートコーン）に及ぼす効果は異なりました。

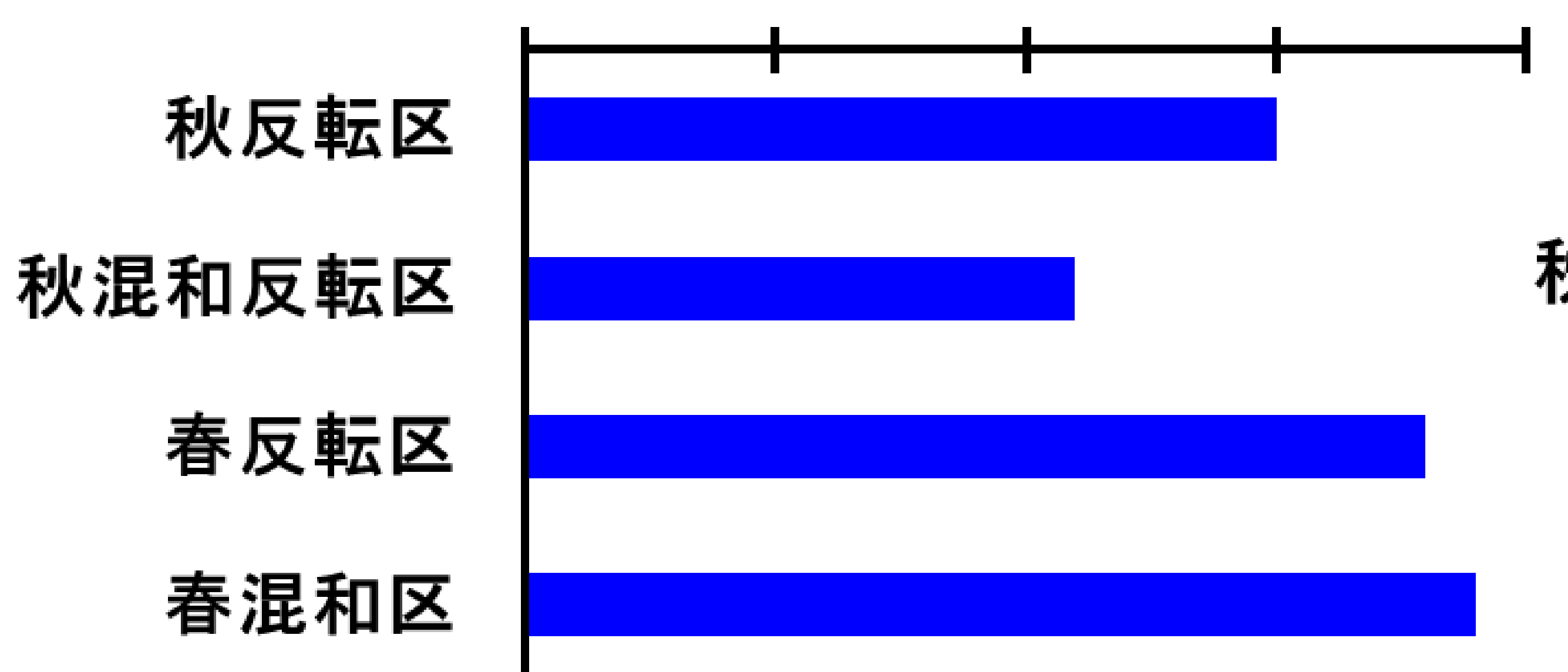
①秋に堆肥をまいて混和してから反転すると(秋混和反転区)、生育・養分吸収量・収量が劣ることがあるので避けましょう。

②春の堆肥施用（反転・混和とも）は、秋施用よりも初期生育が優る傾向にあります。最終的な収量もてんさい、スイートコーンでは優る傾向でした（ばれいしょでは同等）。

③堆肥の肥料換算係数（堆肥に含まれる養分の何%が化学肥料と同等の効果をもつ）については、秋施用でも春施用でもこれまでと変わらず、窒素については20%程度、リン酸については60%程度でした。

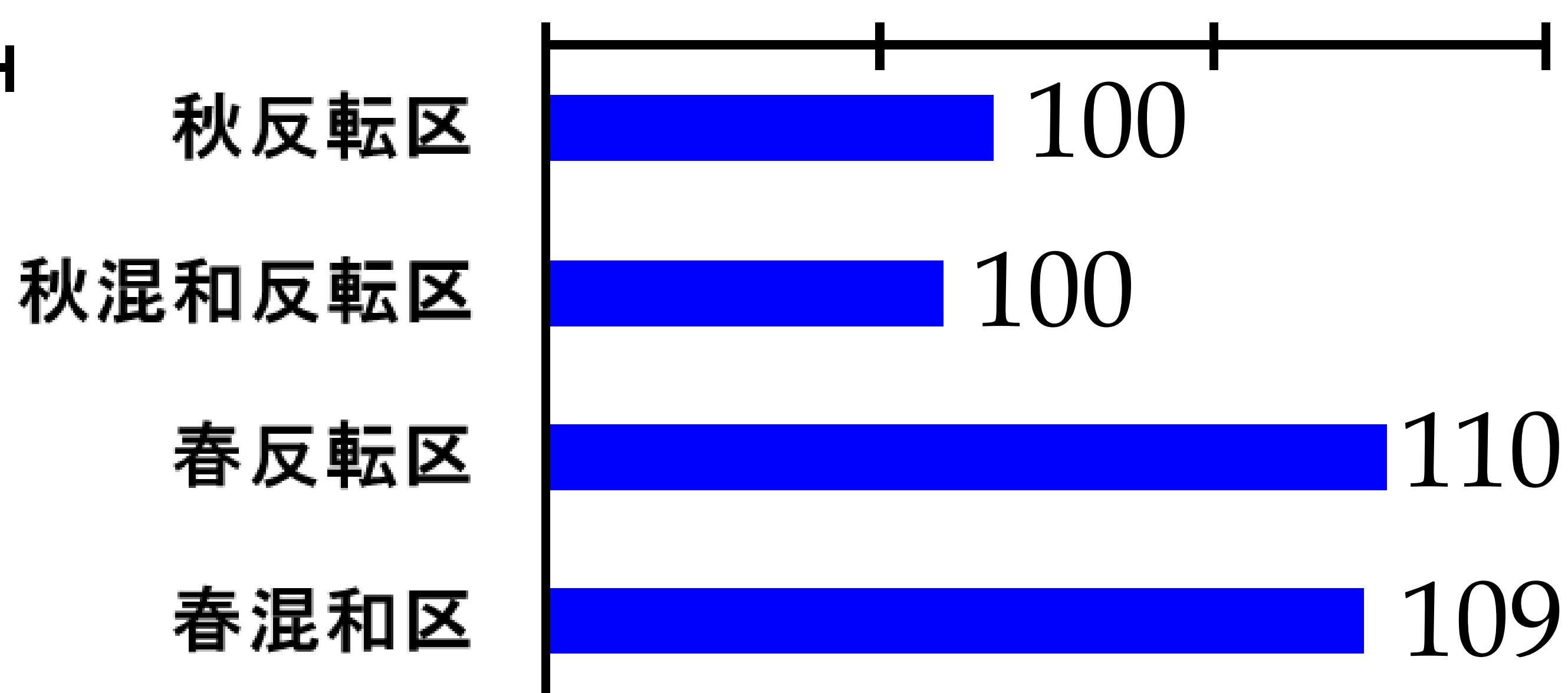
てんさいのリン酸吸収量(kg/10a、6月末)

0.0 0.5 1.0 1.5 2.0



てんさいの糖量(kg/10a)

1,100 1,200 1,300 1,400



普及 Dissemination

以上のように、堆肥の春施用は秋施用よりも畑作物の生育・収量の向上が期待できますが、秋施用(秋反転)には作業分散や病害虫リスク(タネバエの発生等)の低減等のメリットがあるので、生産現場の営農実態に合わせて施用時期と混和方法を選択してください。

連絡先 Contact

十勝農業試験場
研究部 生産環境グループ
0155-62-2431
tokachi-agri@hro.or.jp